

道德教育郷土資料

しまねの道德

小学校中学年

島根県教育委員会



しまねの道徳

もくじ

道徳の時間は……	1
大きな心を育てよう……	2
1 新しい田んぼを作ろう…… 日白池をうめ立てたト蔵孫三郎	3
2 泳げ、空高く…… 意宇川のこいのぼり	9
3 一万まいの花びら…… 島根がほこる和菓子職人 土江徹さんのちよう戦	15
4 お手本はいらない…… 青木実三郎先生の絵の指導	21
5 たった一人のお医者さん…… 遠藤武さんの決意	27
6 石見神楽面作りの喜び…… 面師 柿田勝郎さんの思い	33

7 よみがえれ、お茶畑…… お茶農家 吉田茂さんの決意	39
8 三かぶのいぐさ…… たたみ表の父 国東治兵衛	45
9 名賀にひびけ、汽笛…… ESLが走る町 津和野町	51
10 日本のファラデー…… 科学者になった永海佐一郎さん	57
11 蒸気船がつなぐ未来…… 松浦斌の強い思い	63
12 少しだけなら……	69
13 レストランで……	73

道徳の時間は……

■ お話を読んで、いろいろなことを感じよう。

自分らしさを見つけよう



たくさんの人とかかわり
合ってすごそう



■ みんなで話し合って、いろいろな考え方を知ろう。



自分自身をよく知り、
みんなに伝えよう。

〇〇さんの考えは
参考になるな。

〇〇さんはこんな
考えをもっていたんだ。



友だちの考えに耳をかたむけよう。



それぞれの考えについて、
話し合おう。

そうは言っても
むずかしいときも
あるな。



■ 自分をみつめ、よりよい生き方を考えよう。

● なやんでいること、こまっていることのわけ(理由)
を見つけよう。

● これからのことについて、真けんに考えよう。

なやんでいる
のは、自分だ
けではない。



大きな心を育てよう

すてきな 自分になる

自分で考える

12 少しだけなら

今よりよい自分に

- 1 新しい田んぼを作ろう
- 3 一万まいの花びら
- 7 よみがえれ、お茶畑ちゃばたけ
- 10 日本のファラデー



みんなと仲よくすごす

きまりやマナーを守るまも

13 レストランで

みんなの役に立つやく

- 5 たった一人のお医者さんひとり いしゃ
- 8 三かぶのいぐさ

ふるさとを大切に

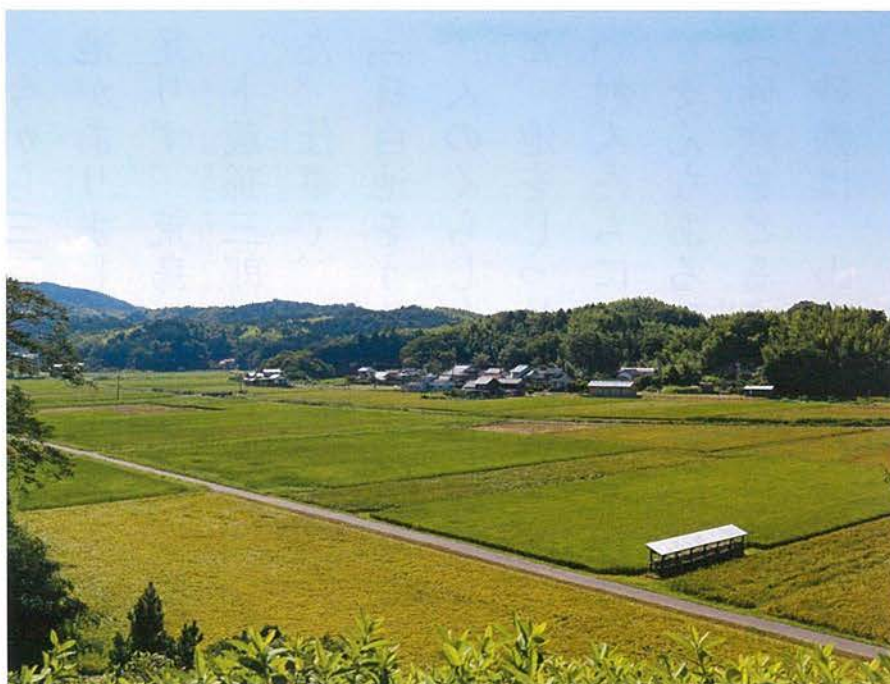
- 2 泳げ、空高くおよ
- 4 お手本はいらない
- 6 石見神楽面作りの喜びいわみ かぐらめん よろこ
- 9 名賀にひびけ、汽笛なよし きてき
- 11 蒸気船がつなぐ未来じょうきせん みらい



1

新しい田んぼを作ろう

ひじら
日白池をうめ立てたト蔵孫三郎
ぼくらまでさぶろう



今のト蔵新田

ト蔵孫三郎について

- 1696年 竹崎村（仁多郡奥出雲町）に生まれる。
- 1721年 荒島村（安来市荒島地区）にうつり住む。
- 1723年 日白池（安来市荒島地区）のうめ立てを始める。（27才）
- 1725年 門生村（安来市島田地区）に畑を切り開く。
- 1728年 羽入（松江市東出雲町）に新しい田を切り開き始める。
馬潟（松江市馬潟町）の港を作り直す。
- 1729年 十神山（安来市安来町）に木を植える。
- 1730年 羽入の田ができる。
- 1733年 下意東村（松江市東出雲町）の坂下道を作り直す。
- 1739年 日白池のうめ立てが完成する。（43才）
別石（安来市赤江地区）に新しい田を切り開く。
- 1743年 牛や馬の市場を開く。
- 1744年 揖屋明神（松江市東出雲町）の森下道を作る。
- 1745年 揖屋（松江市東出雲町）のみこ谷に新しい道を作る。
- 1755年 荒島村でなくなる。（59才）

（カッコ内の地名は、今の地名）

やすぎ
安来市



今から三百年ほど前、荒島村（今の安来市荒島地区）には、日白池という大きな池がありました。山にはさまれて平地が少ないうえ、日白池があるために田んぼが足りず、荒島村の村人たちは、まずしい生活を送っていました。

ト蔵孫三郎は、竹崎村（今の奥出雲町竹崎）にある、砂鉄をとる家に生まれしました。仕事で、荒島村にたびたび来ていた孫三郎は、

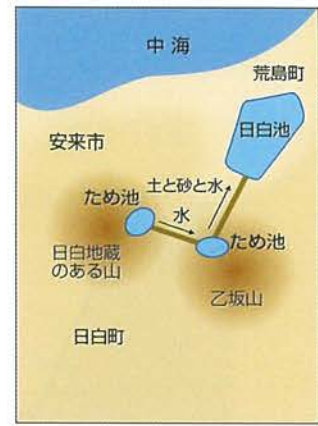
「日白池をうめ立てて田んぼにすることができたらなあ。米がたくさんとれて、村人のくらしがもっと楽になるだろうに。」

と、池をじつとながめてはつぶやくのでした。しかし、うめ立てなどしたこともない村人たちにとって、それはゆめのような話でした。

そんなある日、孫三郎は、ある考えを思いつきました。

（砂鉄をとる方法で、池をうめ立てることができるかもしれない。）

砂鉄は、山をくずして土や砂を水といっしょに流してとります。同じようにして日白池をうめ立てようというのです。さっそく孫三郎は住まいを荒島村にうつし、新田開発の計画を立てました。そして、松江の殿様に、日白池うめ立ての願いを出し、工事を始めました。



(地名は今のもの)

日白池をうめ立てるには、池の目の前にある乙坂山おとさかの土と砂を使うのがいちばんです。その土と砂を日白池に流すための水は、乙坂山の向かいの、日白地蔵じぞうのある山のため池の水を使うことにしました。

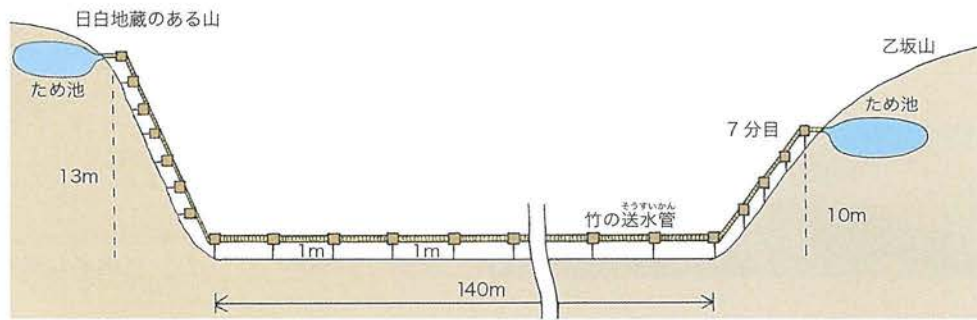
ところが、大きな問題もんだいが孫三郎にふりかかってきました。

日白地蔵のある山にためた水を乙坂山で使うには、水を一度山から下ろして、ふたたび乙坂山に上げなくてはなりません。しかし、それまでの方法では、思っていたように水が上がらないのです。

「あと少しなのに……。日白池のうめ立ては、あきらめるしかないのか。」

孫三郎は、くちびるをかねて目をとじました。頭の中には、いねがゆたかに実りみの、金色にかがやく田んぼの風景ふうけいが広がりました。

(いや、ここであきらめるわけにはいかな。新しい田んぼを作ると、心に決めたのだ。何かよい方法ほうほうがあるにちがいない。)



孫三郎は、工事に使った竹をじっと見つめながら考えました。
 (竹づつの中に水を通したらどうだろう。水がもれないように
 流せば、山の上から下りてきた水のいきおいが弱くならない
 で、乙坂山に水が上がるのではないだろうか。)
 さっそく、竹をたてにわって節をとりぞき、もどおりに
 合わせました。それだけではつぎ目から水がもれるので、竹づ
 つ全体になわをまきつけました。同じようにして作った竹づつ
 をつなげて水を流すと、竹づつの先からいきおいよく水が流れ
 出てきました。

「よし、これを使えば、山へ水を上げることができる。さあ、
 竹づつをたくさん作って、日白地蔵のある山から乙坂山につ
 なぐのだ。」

孫三郎は、みんなで作った五百本もの竹づつを使って、百四
 十メートルの長いつつを十二組作りました。そして、日白地蔵
 のある山と乙坂山の間をわたして、二つの山のため池をつなぎ
 ました。



「それっ、水を流すぞ！」

日白地蔵のある山から長い竹のつつを通ってきた水は、百四十メートル流れてもいきおいを弱めることなく、山の中ほどまで上がりました。村人たちはいっせいに喜びの声をあげました。「やったぞ。水が上がってきた。」

「よし、これならもうだいじょうぶだ。あとは乙坂山から日白池までの水路を作って、土と砂を流せばいい。日白池は田んぼに生まれ変わるぞ！」

流れる水が日の光にきらきらと反しゃして、孫三郎のひとみにうつりました。

その後、孫三郎は十六年もの間、努力に努力をかさねて、ついに日白池のうめ立てを完成させました。

できた田んぼは「卜蔵新田」とよばれ、今も秋になると荒島の土地を金色にかがやかせています。



ひじらじぞう 日白地蔵のある山（左）と、おとさか 乙坂山（右）
まごさぶろう 孫三郎は、この140メートルもの間に水を通しました。



日白地蔵
山のふもとの木かげに、今もひっそりとまつられています。



ぼくら けんしょう ひ ト蔵孫三郎顕彰碑
ト蔵新田の北側に、孫三郎をたたえる記念碑が建てられています。



せつめい ト蔵孫三郎の説明
ト蔵孫三郎顕彰碑の横にあります。



2

泳およげ、空高く 意宇川いいうのこいのぼり

意宇川のこいのぼりについて

平成3（1991）年 だい第1回「みんなであげようこいのぼり」が行われる。

平成23（2011）年 しんさい東日本大震災のため、「みんなであげようこいのぼり」を中止する。

平成24（2012）年 さいご最後の「みんなであげようこいのぼり」がひら開かれる。（第21回）

平成26（2014）年 やくも八雲ゆう人じん会が、意宇川のこいのぼりふっかつ復活をめぐりはじて取り組みを始める。

※こいのぼりを上げる期間きかんは、4月の第2日曜日から5月の第2日曜日までの1か月間。毎年、4月の第2日曜日に「みんなであげようこいのぼり」オープニングセレモニーが行われた。

まつえ
松江市





「わあ、すごい！」

「いっぱい泳いでいるよ。」

松江市八雲町を流れる意宇川の上を、春の風を受けて、
ゆうゆうと泳ぐたくさんのかいのぼり。川の土手には、子どもたちの喜ぶ声がひびきわたります。

意宇川でこいのぼりが上げられるようになったのは、平成三（一九九一）年のことでした。町を元気にしたい、子どもたちが元気に育ってほしいと願う地元の人たちは、考えました。

（使わなくなったこいのぼりを集めて、空いっぱい泳がせたらどうだろう。そうすれば、こいのぼりのように元気な子どもたちが育つんじゃないかな。）

そこで、「意宇川にこいのぼり上げる実行委員会」をつくり、荒木さんを世話役として八人のメンバーで取り組み始めました。

最初の年は、五十ぴきのこいのぼりを上げることができました。その後、毎年、数がふえ、いちばん多いときは、二百五十ぴきものこいのぼりが上げられました。たくさんうつくのこいのぼりが空いっぱいうつくに泳ぐすがたはなんとも美しく、多くの人がとが意宇川をおとずれるようになりました。

こいのぼりを上げる日には、たくさんの子どもたちが集まり、元氣いっぱいにはしゃぐ声が聞こえました。荒木さんたちもうれしくなりました。

意宇川の空いっぱいたいへんにこいのぼりを上げるためには、大変なこともありました。

まず、一ぴきでも多くのこいのぼりを集めなければなりません。荒木さんたちは、毎年、手作りのちらしを配くばって、こいのぼりの寄付きふをよびかけました。また、じゅんびとして、集まったこいのぼりのひもをじょうぶなものにつけかえたり、こいのぼりがすぐ近くで見られるように、川土手の草かりをしたりしました。

こいのぼりが上がってからも苦労がありました。川の上をふく強い風で、こいのぼりがからまったり、やぶけて落おちたりしてし



週に一度、こいのぼりを下ろして修理しゅうりする



ワイヤーをはる作業は重労働さきょう じゅうろうどう

まうのです。そのたびに、こいのぼりを下ろして修理しゅうりしなければなりません。また、こいのぼりをつるすひもは、切れることがないように、ワイヤーという鉄てつのひもを使つかいます。ひじょうに重おもいワイヤーを下ろしたり上げたりするのは、何時間もかかる大がかりな作業さぎょうでした。それを、こいのぼりを上げている一か月の間に、四回も五回もするのは、「意宇川いいうにこいのぼりを上げる実行委じっこうい員会いんかい」のメンバーたちは、仕事しごとを終おえたあとや休みの日に集あつまって、こうした作業つづを続けました。

意宇川にこいのぼりが上げられるようになって二十年以上いじょうがすぎ、荒木さんたちも年をとって、体力がこれらの作業を続けることがむずかしくなりました。さらに、「こいのぼりをささえる柱はしらが古くなってきて、たおれたら大きな事故じこになってしまうかもしれない。」などという声もあがるようになりました。荒木さんたちは何度も話し合いをし、平成二十四へいせい（二〇一二）年を最後さいごに、意宇川のこいのぼりをやめることにしたのでした。

「こいのぼりが上がらなくなって、残念だ。もう一度、あのこいのぼりが見たい。」

「どうにかまた、こいのぼりを上げることはできないのか。」

という声があちこちで聞かれました。

そこで、地元の青年たちが立ち上がりました。

「意宇川のこいのぼりを復活させよう！」

この青年たちは、子どもたちのところに意宇川のこいのぼりを見て育ったのでした。

「子どものころ、とても楽しみだった意宇川のこいのぼり。これからの子どもたちにも見せてあげたい。」

「あのこいのぼりに元気をもらってきた。また、こいのぼりを上げて、町や人をもっと元気になりたい。」

青年たちは「八雲ゆう人会」を作り、活動を始めました。荒木さんたちがこいのぼりにこめた思いは、たしかに子どもたちに伝わっていたのです。



意宇川のこいのぼり復活をめざす地元の青年「八雲ゆう人会」のメンバー



「みんなであげようこいのぼり」のオープニングセレモニーでは、地元の中学校のすいそ^{がくぶ}う楽部がえんそうをしました。



オープニングセレモニーで、地元の保育園^{ほいくえん}の子どもたちによる出しものも見られました。



地元の小学生が作った手作りのこいのぼりも上げられました。



こいのぼり^{どうし}同士がからまることをふせぐために、3メートルの竹のぼうに、こいのぼりを2ひきずつるす^{くふう}工夫をしました。



こいのぼり上げる期間^{おと}が終わると、こいのぼりのよごれを落^おとし、次の年まで大切に保管^{かん}しました。



「八雲ゆう人^{やくもじん}会」の取^と組^くみは、新聞にも取りあげられました。みんなの期待^{きだい}の高さがうかがえます。

3

一万まいの花びら

しまね
島根がほこる和菓子職人

つちえとおる
土江徹さんのちよう戦

いずも
出雲市



わがししょく しけん
和菓子職の試験で和菓子を作る土江さん



土江さんが作った和菓子

土江徹さんについて

- しょうわ 昭和51 (1976) 年 ひかわぐん ひかわ いずも
釜川郡斐川町 (今の出雲市) に生まれる。
- へいせい 平成 8 (1996) 年 ぎふけん おんか し こうばい しゅぎょう
岐阜県「御菓司 香梅」に修業に行く。
- 平成16 (2004) 年 テレビ
「TVチャンピオン 和菓子職人選手権」(テレビ東京放送) に出場する。
- 平成20 (2008) 年 ゆうしゅう
「選・和菓子職 優秀和菓子職」としてみとめられる。
- 平成22 (2010) 年 ぜんこく けんきゅうだんたいれんこうかい ぶ じゅう
全国菓子研究団体連合会青年部コンテストにおいて準グランプリを受賞する。
- 平成23 (2011) 年 こうしゅうかい し どうしゃ
フランスで行われた和菓子講習会に、指導者としてまねかれる。
- 平成25 (2013) 年 はくらんかい こうけい さいこう めいよ そうさい
全国菓子博覧会 (工芸菓子) において最高賞「名誉総裁賞」を受賞する。
- 平成26 (2014) 年 まつえ タイワン タイペイ しちよう せいざく
松江市から台湾・台北市長におくる工芸菓子を制作する。



つちえ
土江さんの作品

出雲市斐川町に「福泉堂」という和菓子のお店があります。お店のとびらを開けると、美しい花に目がとまります。まるで本物に見えるこれらの花は、すべてお菓子の材料でできています。島根県がほこる和菓子職人、土江徹さんが作ったのです。

徹さんは、その福泉堂に生まれました。朝、徹さんが目を覚ますと、いつもあまいかおりがしてきます。お父さんがあんこをにているのです。徹さんは、おさないころから、心をこめて和菓子を作るお父さんのすがたを見て育ちました。

徹さんは、高校生になったころから和菓子職人をめざすようになりました。お父さんの手伝いをするうちに、細かい作業、ていねいな仕事求められる和菓子の世界に興味をもつようになったのです。

高校を卒業した徹さんは、岐阜県の和菓子屋さんで働くこ



とになりました。五年間の修業の始まりです。

朝はだれよりも早く起き、おし器を温め、お湯をわかします。朝ご飯がすむと、仕事が始まります。ししうや先ぱいが作った和菓子、町じゅうのお店にとどけてまわるのです。「土江くん、何やってるんだ。てきぱきとやってくれないとこまるよ。」

「はい、今すぐやります！」

ぼんやりしているひまなどありません。

(つかれたなあ。早くねたいなあ。)

(もうやめたい。出雲に帰りたい。)

そう思うこともありましたが、でも、どんなにつかれています。徹さんは真夜中に練習をするのでした。それだけでは足りず、休みの日にも仕事場へ足を運びました。そんな努力のかいがあつて、三年目でやっとあんこ作りをまかされるようになりました。

修業も終わりに近づいたころ、デパートで和菓子作りの実



演^{えん}をする仕事^{しごと}がありました。

「この和菓子^{わがし}、おいしいですね。」

「和菓子^{わがし}って、そうやって作るんですか。食べるのがもったいないなあ。」

お客さん^{きやくさん}の言葉^{ことば}に、徹さん^{とほる}は思いました。

（たくさん^{たくさん}の人が感動^{かんとどう}する和菓子^{わがし}を作りたい。）

これが、徹さん^{とほる}の和菓子^{わがし}作りの目標^{もくひよう}となりました。

五年間^{しゅごう}の修業^{しゅぎょう}を終えた徹さん^{とほる}は、出雲^{いずも}の福泉堂^{ふくせんどう}にもどってお父さん^{とう}からもぎじゅつを学び、和菓子職人^{しやくにん}としての力^{ちから}をつけていきました。やがて、その力がみとめられ、わかくして和菓子職人^{しやくにん}の日本一^{にっぽんいち}を決めるテレビ番組^{ききま}に出場^{しゅつじやう}することになりました。徹さん^{とほる}は、力をためすチャンスだと、いっしょうけんめいに練習^{れんしゅう}し、本番^{ほんぱん}では自分^{自分}がなっとくできる作品^{さくひん}ができあがりました。ところが、結果^{けっか}はなんと四人中^{しにんちゆう}最下位^{さいかいい}。

（自分の力はまだまだ足りなかったんだ。）

それからの徹さんは、よりいっそう和菓子作りにはげみました。

(自分のもっているものをすべて作品につめこみたい。)

徹さんは、平成二十五(二〇一三)年四月に開かれる「全国菓子大博覧会」をめぐりました。この博覧会は、お菓子のオリンピックともいわれ、百年以上の歴史があります。徹さんは毎日の仕事を終え、博覧会に出す作品づくりに情熱をもやし、ますます努力を重ねました。

そうして、さくらの花がさきほこる作品ができあがりました。一万まいのさくらの花びらは、作るのにたくさんの時間がかかりました。作品は多くの人びとの目をひきつけて楽しませ、最高の賞である「名誉総裁賞」を受賞しました。

名誉総裁賞を受賞した作品



福泉堂の職場では、今日も和菓子作りにはげむ徹さんのすがたがあります。自分へのちようせんはまだ続いているのです。



こうげい が し
工芸菓子

美しい日本の花や鳥、四季それぞれの景色を、お菓子の材料だけを使って作り上げる和菓子を工芸菓子という。お菓子作りの知識と高いぎじゅつとが必要である。



めい よ そうざいしょう
名誉総裁賞の「たて」

「全国菓子大博覧会 ひろしま菓子博2013」で、名誉総裁賞を受賞したときの「たて」。



和菓子職認定試験で作った5種類の和菓子
和菓子には、生菓子やようかんなど、季節に合わせたいろいろな種類がある。作り方もさまざまで、種類のちがう5つの和菓子を作るのは大変だった。



フランスで和菓子をしょうかいする徹さん(右)
フランスのナント市で行われた和菓子のイベントにまねかれ、うで前をひろうした。



お菓子でできたおすし

徹さんは、お菓子の材料を使って、いろいろなものを本物そっくりに作ることができる。

4

お手本はいらない

あおき じつさぶろう
青木実三郎先生の絵の指導



青木実三郎先生



じどう
児童がかいた絵

青木実三郎先生について

- めいじ 明治18 (1885) 年 に たぐん ま き 仁多郡馬木村 (今の奥出雲町) に生まれる。
- めいじ 明治41 (1908) 年 し はん 島根県師範学校を卒業し、馬木村尋常高等小学 校で絵を教えるようになる。
- たいしょう 大正4 (1915) 年 ぜんこう じ どう 馬木小学校校長になる。全校児童に絵を教える。
- しょうわ 昭和2 (1927) 年 こくさい び じゅうきょういっかい ぎ チェコスロバキア国際美術教育会議で馬木の児 童がかいた絵がしょうかいされる。
- しょうwa 昭和43 (1968) 年 83才でなくなる。

おくいずも
奥出雲町



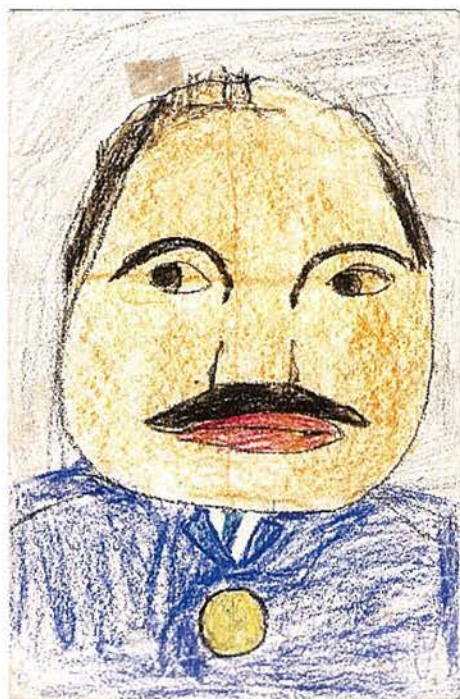
「季節きせつによってうつり変わる馬木まきの景色けしきは、実に美しい。」
これは、今から百年ほど前に、仁多郡馬木村にたぐん（今の奥出雲町おくいずも）で小学校の先生をしていた青木実三郎あおきじつさぶろうの言葉です。実三郎は、美しい馬木の自然しぜんに囲かこまれたくらしが大好きだいすきでした。

実三郎は三十六年間小学校の先生をしていた中で、特に図画とくを教えることに力を入れていました。実三郎が先生になったばかりのころ、子どもに絵を教えるときは、花や動物どうぶつをかいたお手本をそのままかき写うつすことが大切だとされていました。

（美しい自然が目の前に広がっていて、そこにくらしているたくさんの人たちがいるのに……。）

（子どもたちは、それをかく力があるのに……。）

子どもたちがお手本のまねをして絵をかく間、子どもたちにまかせきりにする先生がいることや、まったく同じ絵ができあがることが、わかい実三郎には（それでも絵を教えていることになるのか。）と、がまんできませんでした。



当時の子どもがかいた青木実三郎先生

実三郎の絵の教え方は、それまでの教え方とはまったく違っていました。

「お手本をはなれて、自分の好きな絵をかくこともよいことです。自分の考えで思い切ってかくのです。」

お手本を使わずに、絵をかく人が自分でかきたいことを見つけて、思ったおりに表現するように教えたのです。実三郎は子どもたちが絵の題材を選ぶことを大切に、身近な山や四季のうつり変わり、祭りや農作業といった馬木の自然や文化、人びとのくらしを深く見つめさせ、感じたままをすなおにかかせました。

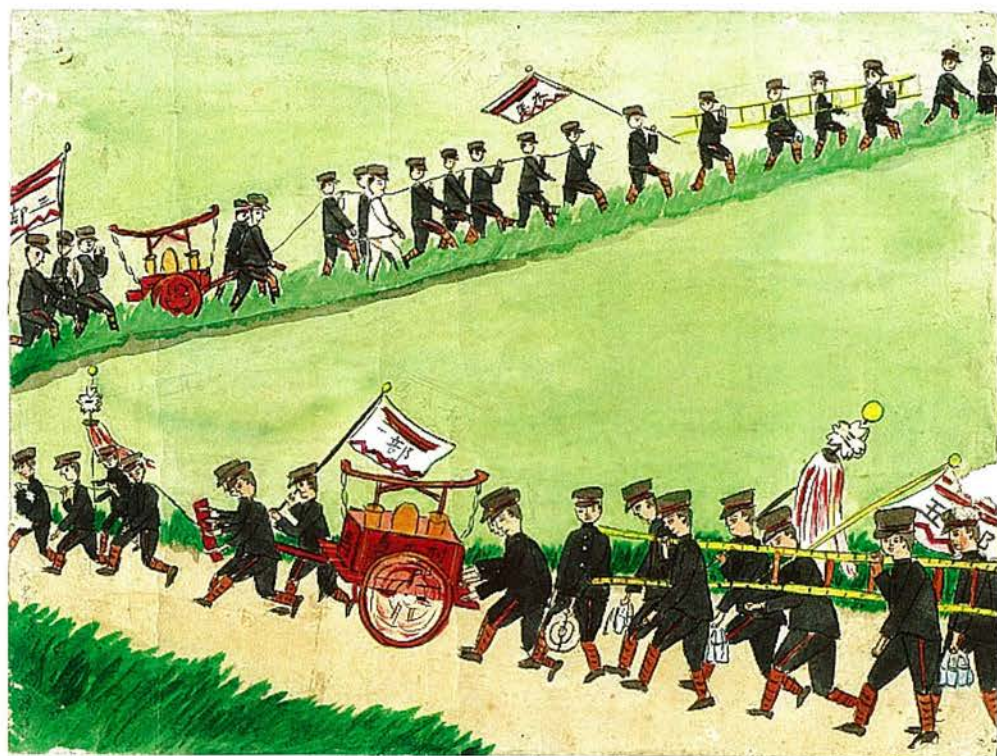
このやり方に反対する先生たちもいましたが、実三郎は、

（子どもたちが本来もっている絵をかく力を引き出したい。）

（お手本をまねさせるだけでは、絵をかく力を育てることはならない。）
という自分の考えを変えることはありませんでした。

実三郎の新しい教え方で、子どもたちは自分が感じるまま自由に絵をかく楽しさを知ったのでした。実際に花や景色をじっくり見て、感じたことを思い出しながら絵をかく回数が、だんだんふえていきました。

やがて実三郎は、自分の教え方は正しい、と強く自信をもつようになりました。そしてある日、子どもたちの前ではっきりと言ったのです。



「お手本をはなれて、自分の好きな絵をかくことはよいことです。いろいろな題材を見つけて、かきたいものをたくさんもちましよう。そして、その中から、かいてみたいと思ったものを選び、どんどんかきましよう。」

子どもたちが目をかがやかせながら絵をかくすがたを見て、実三郎は、子どもたちとともに、絵をかく喜びを感じたのでした。

その後、東京で行われた「全国学生図画展覧会」で、馬木小学校の子どもがかいた絵が大変ひょうばんになりました。上の絵もその一つで、今でも馬木小学校の校長室にかざられています。当時、馬木にあった五つの消防隊がわざを競う大会の様子をかいたものです。この絵をかいた高橋さんは言います。

「先生は、わたしが『あっ、そうか。』と、すなおに思える言葉をかけてくださいました。絵にかく人物と同じ動きを自分も実際にしながら考え、一つ一つ

ていねいに、見たまま、感じたままにかきました。先生のおかげで、『よし、最後まであきらめずに、ていねいにかきあげるぞ。』と、どんどんやる気がわいてきたのを覚えています。」

そして、実三郎が教えた馬木の子どもたちの作品が、ヨーロッパやアメリカにわたって、外国の人にも見てもらえるようになりました。

昭和四十三（一九六八）年、実三郎は八十三才で周りの人たちにおしまれながら、生まれ育った馬木の地でこの世を去りました。

「なくなられた今でも、教えてもらったわたしたちみんなの中に、先生の教えは生きています。」

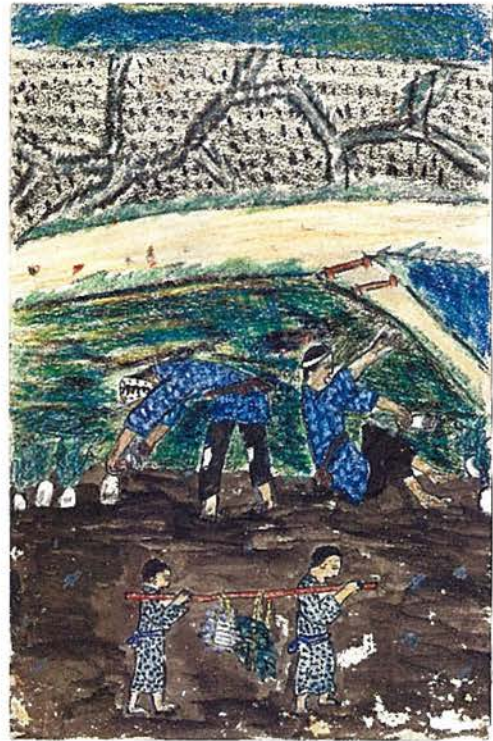
高橋さんだけでなく、地いきの人たちが、実三郎が教えた子どもたちの作品をほんしたり、くらしの絵の展示会を開いたりして、これから生まれてくる人たちにも、実三郎の教えを伝えようとしています。



あお き じつさぶろう さくむん
青木実三郎が教えた子どもたちの作品



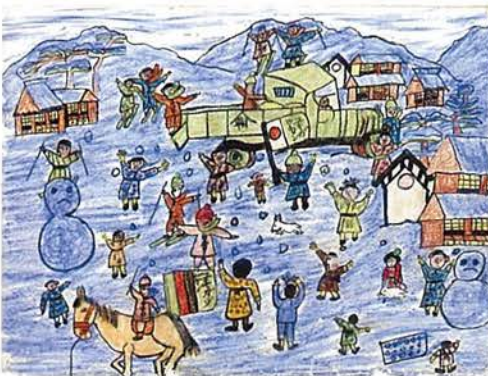
「秋の収穫作業」 6年生



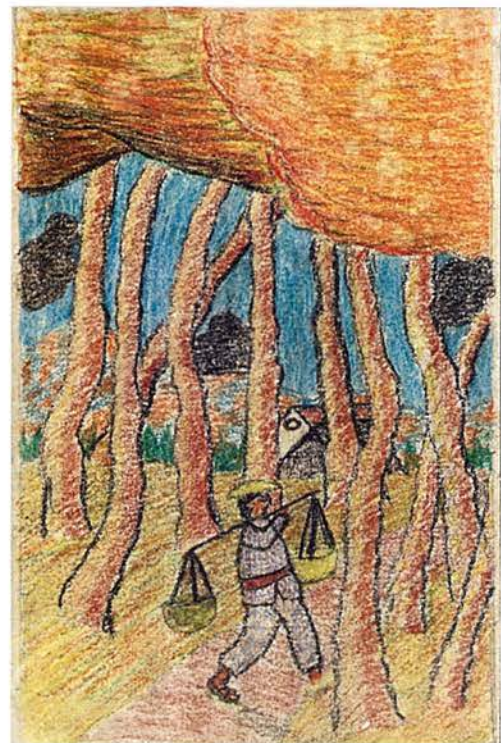
「大根」 6年生



「秋の収穫作業」



「ユキガッセン」 4年生



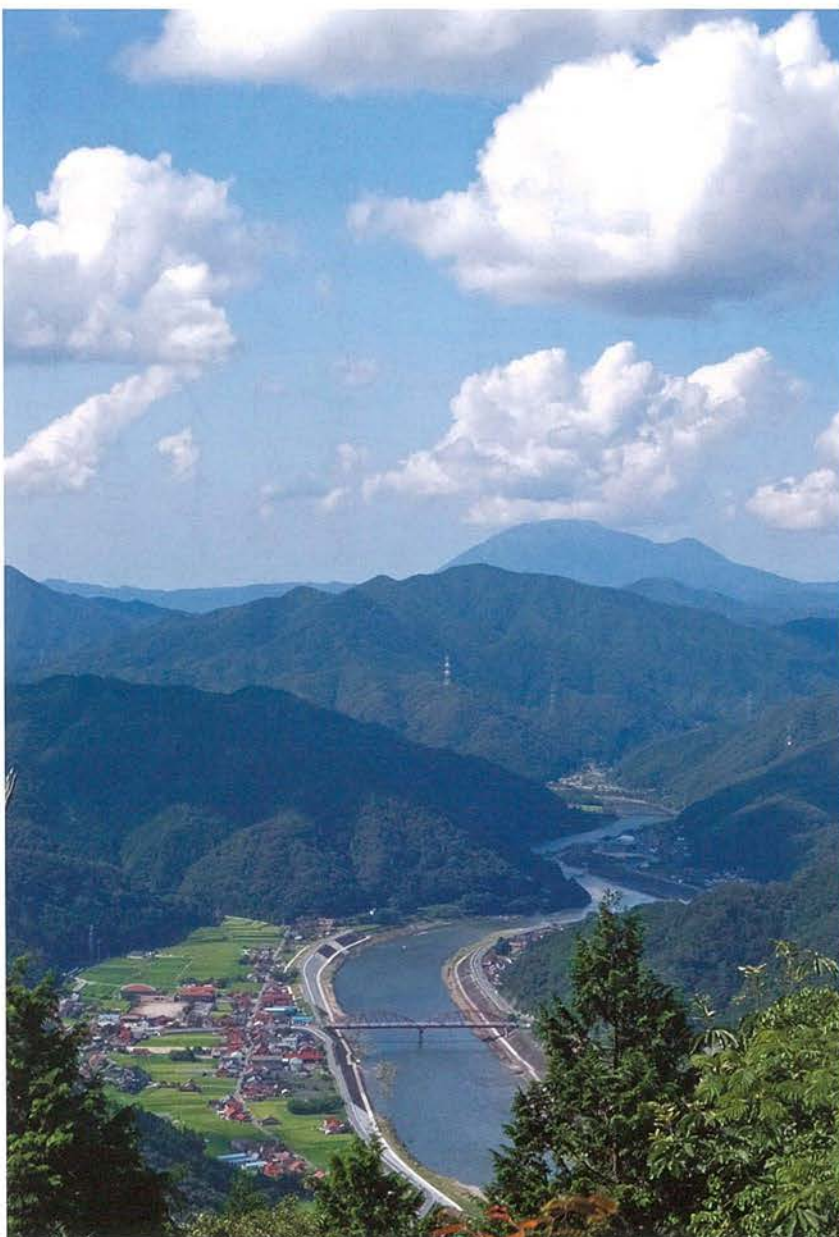
「茸」 6年生

5

たった一人のお医者さん

えんどうたけし
遠藤武さんの決意

大和村のしんりよう所があつた場所を流れる江の川（都賀大橋が見える）



みさと
美郷町



遠藤武さんについて

- 大正9（1920）年 おお ち ぐん 邑智郡大和村（今の美郷町）に生まれる。
- 昭和25（1950）年 けいおう ぎ じゅく そつぎょう 慶應義塾大学を卒業する。
- 昭和32（1957）年 ち ば けんりつけっせいけんきゅうじょ はたら 千葉県立血清研究所で働く。
- 昭和41（1966）年 こくみんけんこう ほ けんしんりようじょしやうだい 大和村国民健康保険診療所初代所長になる。
- 平成4（1994）年 へいせい めい 大和村名誉村民になる。
- 平成24（2012）年 92才でなくなる。

「村にお医者さんがいたらなあ。」

「遠くの病院に行っている間に、けがも病気も悪くなってしまう。」

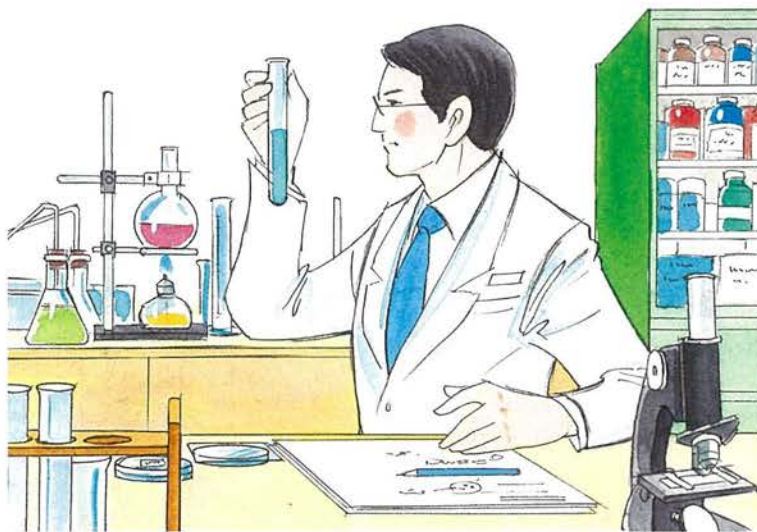
昭和三十八（一九六三）年からの四年間、邑智郡大和村（今の美郷町）には、お医者さんがいませんでした。それまでいたお医者さんが病気でおれてしまったのです。そのため、けが人や急病人は遠くの町まで行かなくてはならず、村の人たちは、心配しながら生活していました。

大和村の村長は、こうした不安をなくすために、村にしんりよう所をつくることにしました。しかし、そのためにはお医者さんが必要です。

「だれかこの村に来てくれるお医者さんはいないか。」

みんなで相談して、千葉県で病気の研究をしている大和村出身の遠藤武さんをお願いすることになりました。早速、村長が遠藤さんの家へ行って、話をしました。

「遠藤先生しかいません。どうか村にもどって、こまっ
ている村の人を助けてください。」



この話を聞いた遠藤さんは、ふるさとである大和村の人たちのことが心配でたまらなくなりました。

つぎ
次の日、遠藤さんが働いている研究所の所長しよちやうにこの話をする
と、

「今している研究はどうなるんだ。それに、村でたった一人ひとりの医者になるなんて大変たいへんだぞ。」

と、何度なんども引きとめられました。

遠藤さんはなやみました。このまま研究けんきゆうを続けるか、大和村に医者としてもどるか……。

（研究はだれかに続けてもらえばよい。）

（わたしを必要とする人がいるんだ。）

遠藤さんはついに大和村に帰る決意けつぎをして、研究所の仕事しごとをやめました。

大和村に帰った遠藤さんに、ふるさとをなつかしむ時間はありませんでした。午前中はしんりよう所で、午後は車でかん者じゃ



さんの家に行ってしん察さつです。夜中でも、急病人きゅうびょうが出ると、すぐに車に乗って出かけました。地いきの学校へ校医こういとして行くことも、けがの手術しゅじゅつをすることもありました。

遠藤えんどうさんは、村の人たちのためにせいっぱい働はたらきました。村で火事かじが起こった夜、いつ来るかわからないけが人のために、しんりよう所の電気をつけて待まちっていたこともあります。

「先生、ありがとうございます。」

「先生、またよろしく願ねがいします。」

気がつけば、村の人たちにとって、遠藤さんはなくてはならない人になっていました。そんな遠藤さんの家には、季節きせつの野菜や果物くだもの、大和村だいわの中心を流ながれる江えの川でつれたアユなど、村の人たちからのおくりものがたえませんでした。

江の川は大和村の中心を流れる大きな川です。

昭和四十七しやうわ（一九七二）年に大雨がふり、江の川周辺しやうへんの町や





昭和四十七年の水害でひ害を受けた、都賀大橋（上）と村（下）の様子

村は大きなひ害を受けました。電話はつながらず、道路や橋は流されてしまいました。遠藤さんは、「通ることができない道路がたくさんあるなら、建設とちゅうでまだ汽車の走らない線路やトンネルを使えばいい。」

と、車に乗って、線路やトンネルを何度も行き来しては、村じゅうのけが人や病人を治りようしました。

「大和村に遠藤先生が来てくれてよかった。」

運動会で村の人といっしょに楽しんでいた先生。神楽と自然が大好きだった先生。

村の人たちはみんな、先生が大好きでした。

平成二十四（二〇一二）年十二月、多くの人からしたわれた遠藤さんは、九十二才の生がいを終えました。



めいよ ぞんみん 名誉村民のしょう号をおくられたときの遠藤
えんどう 武さん（当時72才）



むかし つが おおはし 昔の都賀大橋



へいせい 平成25年、遠藤さんの話を知った地元の^{だいわ}大和小学校の5、6年生は、^{えんどう}遠藤さんといっしょに働いていた方にお話を聞きました。そして、^{がくしゅうはっぴょう}学習発表会で、そのお話をもとにしたげきを発表しました。

6

石見神楽面作りの喜び 面師 柿田勝郎さんの思い



柿田勝郎さんについて

- | | |
|-----------------------|--|
| しょうわ
昭和17 (1942) 年 | ブサン かんこく
釜山 (韓国) に生まれる。 |
| 昭和20 (1945) 年 | 日本に引き上げ、浜田市長浜町で育つ。 |
| 昭和35 (1960) 年 | こうとう ふつう そつぎょう
浜田高等学校普通科を卒業する。
ひっき はんた はし
筆記具を販売する会社で働き始める。 |
| 昭和45 (1970) 年ごろ | しゅ味で神楽面を作り始める。 |
| 昭和47 (1972) 年 | 会社をやめて、神楽面の工ばうを開く。 |

はまだ
浜田市





ながはましゃちゅう はちまん はんにや
長浜社中「八幡」般若面

これは、石見神楽を舞うときに使うお面です。何でできていると思いますか。答えは、紙です。紙だと、やぶれたりこわれたりしそうですね。でも、このお面は、今から四十年以上も前に浜田で作られて、何度も神楽で使われましたが、どこもこわれていません。

どんちき どんちき どんちき
どんちき どんちき どんちき
どんどこ どちき
どちき どんどん

秋になると、石見地方から広島県にかけて、町のいろいろな神社から、神楽のにぎやかな音が聞こえてきます。お面やごうかな衣しように身につけた舞い手が、鬼ぼうやや弓矢などを手にして、おはやしに合わせて舞います。古くから伝わる物語をもとにした神楽は、農作物がとれた喜びと、自然への感謝の気持ち

さの じんりん
佐野社中「塵輪」赤鬼





佐野社中「有明」化け猫

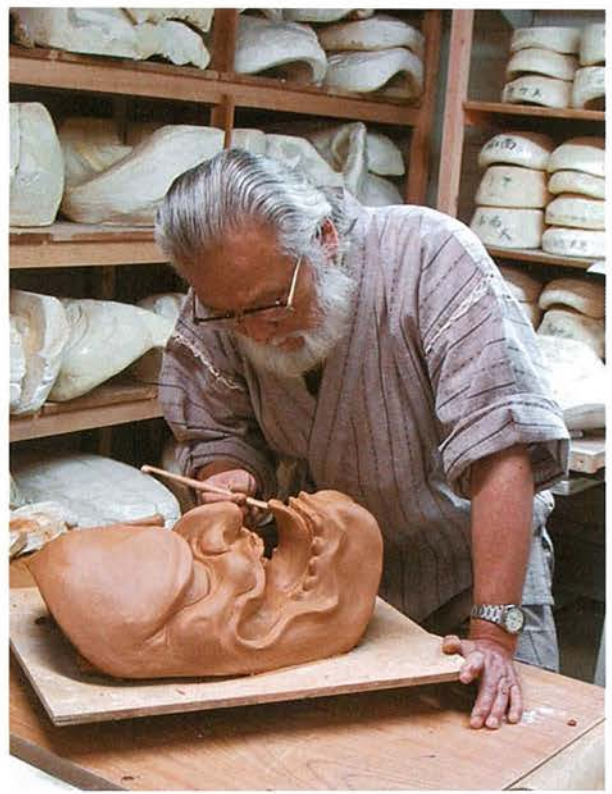
ちを表すためのものでした。

神楽の音が聞こえると、あちらこちらで、子どもたちが舞いをまねてポーズを決めます。石見神楽は、小さな子どもからお年寄りまで、多くの人びとに愛され続けているのです。

石見地方には神楽を舞う団体が百五十以上あり、神楽が大切に守られ、受けつがれてきました。そこで使われるお面は、もともと木でできていました。やがて、動きの速い舞いが広まったことで、紙でできた軽いお面が求められるようになりました。お面を作る面師は、浜田になくてはならない人なのです。

石見神楽面の面師の一人に柿田勝郎さんがいます。ここにしようかいしてあるお面はすべて柿田さんが作ったものです。柿田さんのところには、県内だけでなく、広島県や山口県、四国、九州からも注文がきます。

柿田さんのお面作りは、神楽の舞い手との話し合いから始



ねん土で型を作る柿田さん

まります。

どんな神楽で使うのですか。

どの場面で使いたいのですか。

どんな気持ちを表したいのですか。

どんな衣しようにやかぶり物と合わせるのですか。

目の位置、まゆのかたむき、口の大きさなど、少しちがうだけでもお面の表情が変わります。細かいところまでしっかり話し合うことで、舞い手がほしいと思ってるお面のイメージや、その団体が昔から大切に受けついできた伝統が見えてきます。それをもとに、柿田さんは、約一か月かけて、少しずつちがいのあるお面を二まいから三まい作ります。

注文を受け始めたばかりのわかいころは、「ちがうなあ。もっとこうしてもらえんかのう。」と言われ、作り直すことが何度もありました。

（どうしたら舞い手がほしいと思ってるお面が作れるだろう。）

柿田さんの頭の中はいつも、お面のことでいっぱいです。できあがったお面を手

にした舞い手が、「こりゃあ、ええ。イメージどおりだ。ありがとう。」と言ってくれることが、柿田さんの喜びです。こうして生み出された石見神楽面は、十年先、二十年先、ていねいに修理をすれば、百年先であっても使うことができるのです。浜田に神楽面の仕事場を開いて四十数年、数えきれないほどの舞い手と話し、何百まいものお面を生みだしてきた柿田さんは言います。

「石見神楽は、舞いも衣しうも、面も、時代とともに少しずつ形を変えてきました。これからも少しずつ変化しながら、そのときどきの人に愛され、次の時代へと受けつがれていくでしょう。わたしが作ったお面が、この伝統の中にあることは、大きな喜びです。」

石見神楽をえんじる団体の数は、ここ数年、ふえてきているといえます。石見神楽面の作り方を勉強したいと、柿田さんの仕事場をたずねる人も後をたちません。

柿田さんは今日も仕事場で、十年先、二十年先、百年先も愛される石見神楽面づくりにはげんでいます。

にしむらしやちゆう しょう き
西村社中「鍾馗」



石見神楽面（長浜面）の作り方
いわみかくらめん ながはま

① ねん土で型を作る



② 和紙をはる



③ 型をわる



④ うらに柿しぶをぬる



⑤ 目鼻のあなを開ける



⑥ ご粉をぬる



⑦ 色をつける



⑧ 毛を植える



⑨ 仕上げをする



7

よみがえれ、お茶畑ちやばたけ

お茶農家のうか

吉田茂さんの決意けつい



津和野町のお茶作りについて

江戸時代

津和野藩よりお茶の生産がすすめられる。

明治21 (1888) 年

鹿足郡茶業組合が成立。

昭和10 (1935) 年

製茶機械が導入される。

昭和41 (1966) 年

吉田茂さんの祖父が青野山茶園を開き、お茶作りを始める。

平成13 (2001) 年

蒸す工程から製品にするまでの製茶機械を協同で買入れ、茶畑を広げる。

平成25 (2013) 年

ごう雨で茶畑が被害にあう。

つわの
津和野町



平成二十五（二〇一三）年七月二十八日、津和野町で暗いうちにふり出した雨は、明け方になるといっそうはげしくなりました。消防団の一員として地いきの見回りをしていた吉田茂さんは、川の水がものすごいいきおいでふえていく様子をまのあたりにして、心配になりました。

（茶畑は、だいじょうぶだろうか……。）

吉田さんの家は、青野山のふもとの津和野町直地地区にあります。吉田さんはそこで、お茶作りをしています。津和野町では、古くからおいしいお茶が作られており、今でも、茶畑のあざやかな緑をとどころで見ることができます。

雨がやむと、吉田さんは大急ぎで茶畑に向かいました。お茶の木が流されなかったことにほっとしながら茶畑に足を一步ふみ入れると、

「あぁっ！」

吉田さんの足は、ずぼっとひざまでどろの中にはまりこんでしまいました。よく見ると、茶畑は近くにあふれた川から運ばれたどろばかり。なんと、畑のとなりにある小屋の中までどろが流れこんでいるではありませんか。



小屋にしまっていた農具のうぐをやっとの思いで家の近くまで運び出した吉田さんは、そのままその場にすわりこんでしまいました。そのとき、吉田さんの子ども二人ふたりが家の中から出てきました。二人は、すわりこんでいる吉田さんとどろまみれの農具を見ると、すぐに家にもどりました。ふたたび家から出てきた二人の手には、軍手ぐんてがはめられていました。そして何も言わず、農具についたどろを落おとし始はじめたのです。その様子を見た吉田さんも、ゆっくり立ち上がって、いっしょにどろを落とし始めました。

(根ねがやられていなければ、芽めを出すはず。)

吉田さんは、いのるような気持きもちちで、畑ちやばの茶葉ちやばについたどろやごみを一つずついいねいに落おとしましたが、たまったどろが根をだめにしていました。

「そりゃあ、植うえかえるか、あきらめるかしかないでね……。」
そんな声が聞こえた気がしました。一度いちどどろをかぶった土では、新しいお茶の木を植うえても、うまく育そだつかどうか、わかりません。



たとえ順調じゅんちょうに育ったとしても、お茶の葉はがとれるようになるには、六年から七年もかかります。

吉田よしださんは、ねむれない日びをすごしました。

「母かあさん、わしゃあ、どうすればええんかのう。」

吉田さんは、なやみになやんで、長年いっしょにお茶作りをしてきたお母さんに相談そうだんしました。

「あんたが思うようにやってみりやあええわあね。あんたがおじいちゃんから受けうついだ茶畑ちやばたけなんじゃけえね。」

お母さんは、もう育そだつはずのないお茶の木をやさしくなでながら、ぽつりと言いました。そのとき、吉田さんは心を決きめました。（そうだ。ここで負まけていられるものか。）

植うえかえを決意けついした吉田さんを待まっていたのは、流れこんだどろや水につかった畑の土を取りとりのぞく作業さぎょうでした。そのどろを取りとりのぞかないと、新しいお茶の木は植うえられません。



シヨベルカーでどろを取りのぞく人、スコップでどろをかき出す人。たくさんの人が手伝ってくれました。もちろん、吉田さん自身もスコップをふるい続けました。

(もうすぐだ。もうすぐで……。)

吉田さんの手は、まめができてはつぶれをくり返しました。でも、そのいたみは苦になりませんでした。

とうとう、平成二十六(二〇一四)年三月、植えかえの日をおかえました。周りには雪が残り、身を切るような寒さです。新しい木を植える吉田さんの手はすぐにかじかみましたが、作業のスピードが落ちることはありません。吉田さんの体からは、湯気ともうもうと上がりました。とちゅう、ふと顔を上げると、土色一色だった畑に緑の点線がうかび上がっていました。

植えかえ作業は無事に終わりました。新しく植えたお茶の木から、次つぎと新芽が出てきています。今はまだ、小さな小さな芽ですが、時がたてば、青野山のふもとを美しく色どってくれることでしょう。



①茶畑から見る青野山
ちやばたけ あおの



②直地地区の茶畑
ただちちく



③冬に「しも」がおりないように、茶畑に立てられているファン



④植えかえたお茶の木から出た新芽
う しんめ



⑤ごう雨さい害後の津和野町
がい つわの



⑥出荷作業が行われる工場
しゅっ か さきょう

お茶さいばいの1年の流れ

2月	肥料をまく。 木のじょうたいをチェック。
3月	えだを切りそろえる。
4月	新芽が出る。
5月～6月	一番茶のしゅうかく・加工・出荷
7月～8月	二番茶のしゅうかく・加工・出荷
9月～1月	たいひ 堆肥をまく。 虫や病気の予防をする。 木の健康管理をする。

お茶出荷までの流れ（加工）

- (1) しゅうかくしたお茶を蒸す。
- (2) 送風機で冷やす。
- (3) もみながらかわす。
(水分がなくなるまで。)
- (4) 茶葉を折りたたむ。
- (5) 冷ぞう庫でほぞんする。(12度～14度)
- (6) 出荷前に煎ってふくろにつめる。

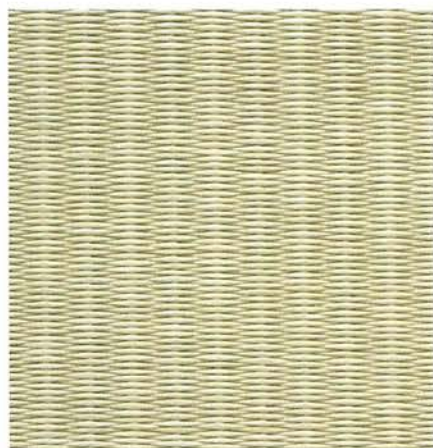
8

三かぶのいぐさ

たため表の父 おもて 国東治兵衛 くにさきじへえ



益田市遠田町にある、国東治兵衛の碑



いぐさで作られた、たたみの表面



たたみが使われている部屋



国東治兵衛について

寛保3 (1743) 年

天明2 (1782) 年

天明3 (1783) 年～

寛政10 (1798) 年

大正13 (1924) 年

遠田村 (益田市遠田町) の紙問屋 (紙をあつかう店) に生まれる。

天明の大ききんが始まり、村のくらしがきびしくなる。

豊後 (大分県) の国東地方や備後 (広島県) からいぐさのなえを持ち帰る。

『紙漉重宝記』の本を出し、和紙の作り方を伝える。なくなった時期は不明。

治兵衛の碑が建てられる。 (カッコ内の地名は、今の地名)

今から二百五十年ほど前、遠田村（今の益田市遠田町）に、国東治兵衛という人がいました。そのころの遠田村では、大雨や日照りなどの悪天候で農作物がじゅうぶんにとれず、多くの人が、食べるものが足りずにこまっていました。「村を、村人のくらしを助ける方法はないだろうか。」

治兵衛はいつも考えていたのでした。

ある日、治兵衛は、自分の先祖が生まれた豊後の国（今の大分県）の国東で、「たたみ表」を作っていることを思い出しました。「たたみ表」は、たたみの表につける「ござ」のことで、「いぐさ」という草のくきを織って作ります。

（そうだ、遠田村で、みんなでたたみ表を作って売るのはどうだろう。）

いぐさを育ててたたみ表を作る作業には、村の人のだれもが何かしら協力できる仕事がありそうです。うまくいけば、安定したしゅう入を得ることができるのではないかと考えたのでした。

治兵衛は、さっそく遠い国東に出向いて、いぐさのなえを分けてもらいました。

（遠田村でも、いぐさはうまく育つじやろうか。）

治兵衛の心配をよそに、いぐさは遠田の田んぼですくすくと育ちました。青あお



と育ったいぐさを見て、治兵衛はなみだを流ながしました。

(村がいぐさでいっぱいになったら、すてきだろうなあ。)

目をとじると、いぐさの緑色みどりにあふれる遠田の景色けしきが、治兵衛の前に広がりました。

治兵衛は、村の人にいぐさを育てることをすすめ、いっしょに育てました。いぐさは、はく息いきが白くなる十二月の寒ささむの中でなえを植うえ、真夏まなつの暑さの中で草をかり取とってほさなくてはなりません。うまく育たないこともあって、きびしい仕事しごとでしたが、村の人たちは、みんなで力を合わせていぐさ作りにはげみました。やがて、遠田のいぐさで作ったたたみ表は有名ゆうめいになり、「遠田表とおだおもて」とよばれました。

しばらくして、備後の国びんご (今の広島県ひろしま) に、「備後表びんごおもて」という、ひょうばんのよいたたみ表があることを聞いた治兵衛は、どうしてもたしかめたくなり、すぐに備後の国へと旅立たびだちました。



色が美しく、しなやかで、じょうぶな備後表は、遠田表とはちがう種類のいぐさからできていました。さらに、このいぐさはとても育てやすいと、備後の人が教えてくれました。

（これはすばらしい。遠田にこのいぐさを持って帰ろう。）
治兵衛は決心しました。そこで、農家をたずねて、いぐさのなえを分けてくれるようにたのみました。

ところが、どの家もなえを分けてくれません。

「それはできません。ここのいぐさは、この国だけで作っているものじゃ。よそには絶対に出したくないんじゃないじゃ。」

それでも治兵衛はあきらめず、足がばうになりながらも、村じゅうを歩き続けました。

「お願いします。ほんの一かぶでいいのです。」

そんな治兵衛のすがたを見た一人の村人が治兵衛に声をかけ、わけを聞きました。治兵衛は、遠田村のことや自分の願いを一生けん命に伝えました。すると、その村人は言いました。

「わかりました。いぐさを分けてあげましょう。」



「本当ですか。ありがとうございます。ありがとうございます。」

治兵衛は村人から、三かぶのなえを大切に受け取りました。そして、何度もお礼を言っていると、急いで遠田に帰りました。

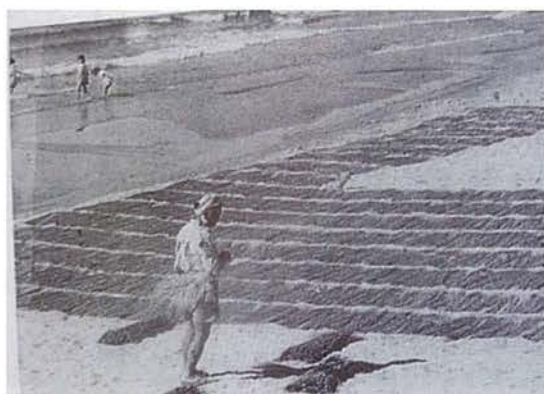
（さあ、がんばるぞ！）

治兵衛は、持ち帰ったなえを植えて育てました。言われたとおり、とても育てやすく、村のみんなもたいへん喜びました。いぐさ作りはやがて、となりの村にも広まりました。遠田村のあたり一帯は、治兵衛がゆめ見た緑の里になったのです。

治兵衛は、いぐさを織ってたたみ表を作る、ごぎ機も広めました。そのころの遠田村では、秋になると、たくさんの農家から、トントンタンと、たたみ表を織る音が聞こえてきました。村の女性たちがごぎ機で織ったたたみ表は、やがて「石州表」とよばれてひょうばんになり、遠田村のくらしをゆたかにしました。



①いぐさが^{そだ}育^{よう}っている様子



②いぐさをかわかす様子
昭和36年ごろ。(『益田市誌(下)』より)



③ござ機^{ばた}
(益田市立歴史民俗資料館蔵)



④ひね車^{おもて}
たたみ表を織るときに使う糸を作る道具。
(益田市立歴史民俗資料館蔵)



⑤ござ機^{ばた}でござを織る様子
昭和30年ごろ。(『益田市誌(下) 巻』より)



⑥美濃郡重要物産品評会(大正4年)
たたみ表がならんでいる様子。美濃郡は今
の益田市。(益田市立歴史民俗資料館蔵)

9

名賀^{なよし}にひびけ、 汽笛^{きてき} ESエスエル SLが走る町 津和野^{つわの}町



雪の中、けむりをはきながら走るSL。手前に写真をとるファンが見える。



美しい景色の中を走るSLやまぐち号



SLやまぐち号について

しょうわ 昭和54 (1979) 年 8 月 1 日	うんこうかい し 運行開始
へいせい 平成17 (2005) 年 8 月	ちく やまか じ はっせい 名賀地区で山火事発生
平成22 (2010) 年 3 月	おう だんけっせい SL応えん団結成
平成25 (2013) 年 7 月28日	やまぐち しまね ごう さいがい 山口・島根豪雨災害
平成26 (2014) 年 8 月23日	さいかい 運行再開

つわの
津和野町





美しいコスモスの花とSL。

SLやまぐち号が走る津和野町は、かつていいSLの写真がとれる町として有名です。名賀地区の美しい景色の中を走るSL、白井トンネル付近の急な坂を、けむりをはきながら力強く上ってくるSL。津和野町名賀地区には、そんなSLの写真をとるために、全国から数多くのファンが集まります。

(たくさんの人に来てもらえる。)

名賀地区の住民はSLファンをこころよくむかえ、いい写真がとれるようにと、線路近くの草をかったりコスモスや菜の花を植えたりしていました。

ところが、SLファンの中から、もっといい場所ですつえいしたいと、人の土地に勝手に車で入ったり、山林の木を切ったりする人が出てきました。

（こまった。このままでは、名賀がめちゃくちやに
されてしまう。）

（どうしたらいいのだろう。）

住民たちはなやむようになりました。

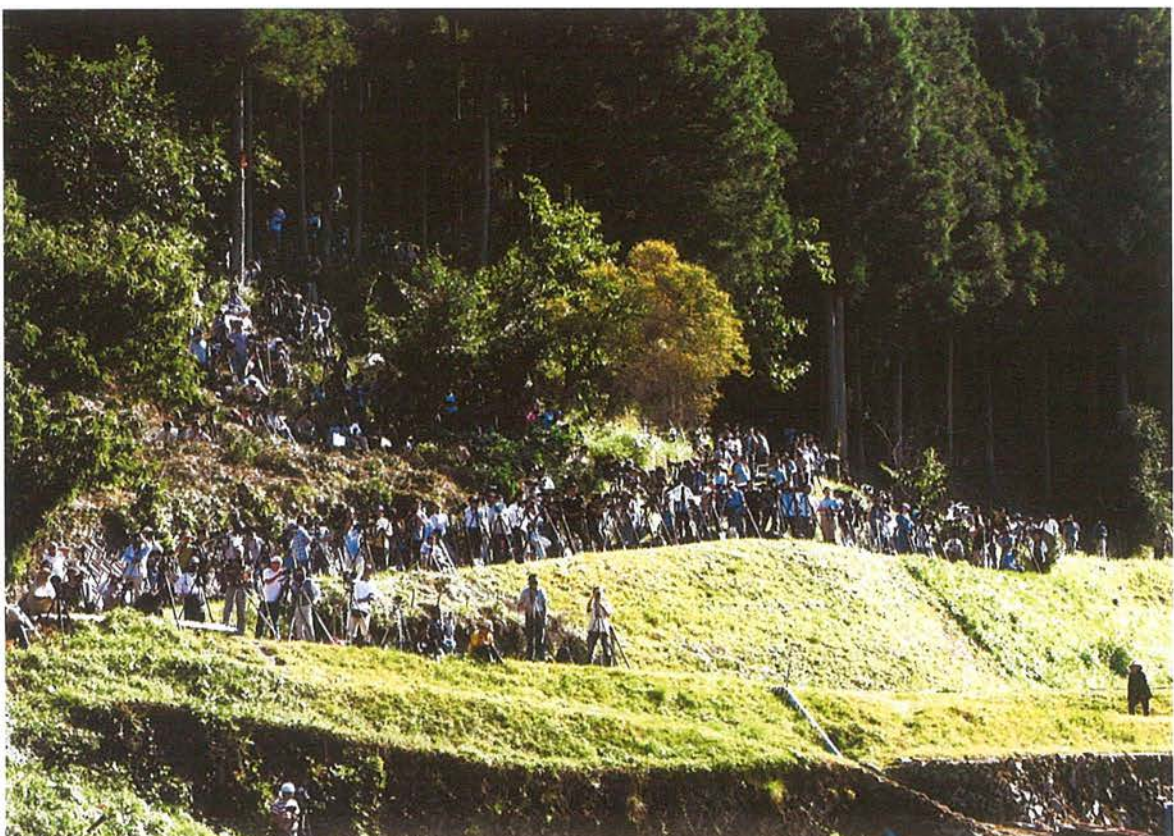
そうした中、平成十七（二〇〇五）年八月に、名
賀地区で山林火災が発生しました。

（ＳＬファンによるたばこの火の不始末が原因では
ないか。）

住民の間に、ＳＬファンをうたがう気持ちがあ
りました。

住民とＳＬファンとの対立をさけるために、両者
で話し合いをすることになりました。結局、火災の
原因はわかりませんでした。ＳＬファンの中から
「住民にめいわくをかけてはいけない。」という声
が上がりました。そこでＳＬファンが、みんなで出
合ったお金で「車の乗り入れを禁ず」「立ち入りを禁

ＳＬの写真をとろうと集まった、たくさんの人たち。





SL茶屋

ず」などのかんばんを立てたり、草かりや花を植える活動
を住民といっしょにしたりするようになりました。

そうした様子を見た住民たちに、けんかしていてもしよ
うがないという気持ちが出てきました。そしてついに、S
L応えん団ができました。名賀地区のために、SLの運行と
SLファンを応えんするのです。

（名賀に来てくれてうれしい、
と最初に思ったときの気
持ちにもどろう。）

応えん団として、何ができるかを相談しました。
そして、応えん団は、今までしていた花の世話や
草かりに加え、年三回SL茶屋のお店を出すこと、
地いきのイベントへの出店などをするようになりま
した。SL弁当やうどんなどを売るSL茶屋は、SL
を見ようと集まった家族連れなどにぎわいます。
SL応えん団員と仲良くなって、毎回顔を出すSL



かんばん

ファンもいます。

(前よりたくさんの方が名賀に来てくれている。)

(名賀を好きになってくれた人がいる。)

活動は、どんどん活発になっていきました。

しかし、平成二十五(二〇一三年)年七月二十八日、今度はこう雨災害が名賀地区をおそいました。家は土砂で流され、道路はえぐりとられ、線路もとぎれてしまいました。もちろんSLやまぐち号は運行できなくなりました。

災害のニュースが流れると、全国のSLファンから多くの温かいメッセージやきふ金がよせられました。それらは名賀の人びとを大いに元気づけました。

平成二十六(二〇一四)年八月、SLやまぐち号運転再開です。待ちに待った再開を、名賀の人びともSLファンもともに喜びました。



お
ごう雨でくずれ落ちた線路



SLやまぐち号

昭和54（1979）年8月1日、山口線に「SLやまぐち号」として蒸気機関車が復活した。「新山口」から「津和野」までの62.9kmを約2時間かけて走る。



平成25年7月28日の大雨災害

ものすごくはげしい雨で、津和野町名賀地区では川がはんらんしたり土砂くずれが発生したりした。それにより、家が流されるなど、大きな被害が出た。



SL応えん団

村田隆義さんを団長に、24名で活動をしている。草かりや駅のそうじなどいろいろな活動をして、SLファンをもてなしている。やまぐち号の運転再開をいわうイベントは、たくさんの人でにぎわった。



SLやまぐち号 運転再開

SLやまぐち号は平成26（2014）年8月23日に新山口駅から津和野駅まで運転が再開された。大雨災害から約13か月がたった。写真は、復旧工事が行われている名賀地区を津和野駅へ向かって走るSLやまぐち号。

10

日本のフアラデー

かがくしゃ
科学者になつた永海佐一郎さん
ながみさいちろう



とうきようこうとうこうぎょう じっけん
東京高等工業学校実験室にて



永海佐一郎さん

永海佐一郎さんについて

- | | |
|-----------------------|--|
| めいじ
明治22 (1889) 年 | おきぐんさいごう なかまち
隠岐郡西郷町中町 (今の隠岐の島町) に生まれる。 |
| 明治35 (1902) 年 | そつぎょう まつえ
西郷小学校を卒業し、松江中学校に入学する。 |
| 明治37 (1904) 年 | 学校に通うお金がなくなり、松江中学校を退学する。 |
| 明治38 (1905) 年 | みなら
東京高等工業学校で見習いになる。 |
| 明治39 (1906) 年 | じょしゆ
東京高等工業学校で助手になる。 |
| 明治41 (1908) 年 | しけん ごうかく
学校の先生になる試験に合格する。 |
| 明治43 (1910) 年 | にいがた ながおかしやうぎょう
新潟県の長岡商業学校の先生になる。 |
| たいしょう
大正2 (1913) 年 | ていこく
東北帝国大学に入学する。 |
| 大正6 (1917) 年 | だいがく
東北帝国大学を卒業する。東京帝国大学大学院に入学する。 |
| 大正8 (1919) 年 | 東北帝国大学の先生になる。 |
| しょうわ
昭和19 (1944) 年 | ようせいじょ かがくぶんせき
東京工業大学養成所化学分析科長となる。 |
| 昭和24 (1949) 年 | ていねん
定年で大学をやめる。 |
| 昭和25 (1950) 年 | けんきう つづ
西郷町に帰り、研究を続ける。 |
| 昭和49 (1974) 年 | めいよ ちやうみんだいいちごう
西郷町の名誉町民第一号となる。 |
| 昭和53 (1978) 年 | 89才でなくなる。 |

隠岐の島町





ながみさいちろう
永海佐一郎は、明治二十二（一八八九）年、今の隠岐の島町
に生まれた科学者です。

佐一郎が四才のころ、お父さんが海の事故でなくなりました。それから、お母さんが一人で、佐一郎と妹を育ててくれました。佐一郎は勉強が好きでした。生活が苦しいことはわかっていましたが、一生けん命に勉強をして、しょうらいは学問に関係する仕事につきたいと思っていました。

（もっと勉強したい。勉強をして英語の先生になりたい。）
体があまりじょうぶではなく、お金もない佐一郎でしたが、
どのようにすれば、自分の好きな学問の道へ進めるのだろう
と、毎日毎日、自分のしょうらいについて考えました。やが
て佐一郎は、東京では、新聞や牛にゆう配達などをしながら、
夜は学校に通って勉強できる方法があることを知りました。
その話を佐一郎から聞いたお母さんは、佐一郎の学問への強
い思いを知り、知り合いである大学の先生に、東京で仕事を



させてもらえないかと、お願いをしてくれたのでした。

しばらくすると、東京の学校で働く仕事が見つかり、夜は英語学校で勉強をすることができるといふ話が佐一郎のところにとどきました。十六才の佐一郎は、飛び上がらんばかりに喜んで、すぐに東京へ向かいました。東京高等工業学校（今の東京工業大学）で働くことになったのです。

佐一郎の仕事は、研究室や実験室のそうじと、実験のじゆんびやかたづけでした。朝、六時三十分には学校に行き、夕方五時まで仕事をしました。仕事から帰ると、夕食をさっすませて英語学校に通いました。給料は少なく、時間に追われる生活で、少しのお金ができると、ずっと入っていないおふろに入るか、魚を食べようか、まようような日びをすごしました。でも、勉強できることが何よりも大きな喜びでした。佐一郎は、夜十二時にねることはありませんでした。（今にきつと学校の先生になるぞ。）という希望を強くもち、



きびしい生活の中で、勉強にはげむ日が一年半続きました。

そんな佐一郎の様子を見ている人がいました。東京高等工業学校で化学を教える加藤与五郎先生でした。加藤先生は、佐一郎に、助手として研究を手伝ってもらうことにしたのです。

助手として働く最初の日、加藤先生は佐一郎に、

「永海くん、君はファラデーを知っているか。」
とたずねました。

「知りません。」

と、佐一郎は答えました。ファラデーは、イギリスで電気などの研究をした、世界でもっともすぐれた科学者の一人です。加藤先生は話を続けました。

「ファラデーは、学校へ行くお金がなくて、町の工場で働いていたのだよ。ロンドン大学のデイビー先生は、仕事の合間を見つけていつも勉強しているファラデーにたいへん感

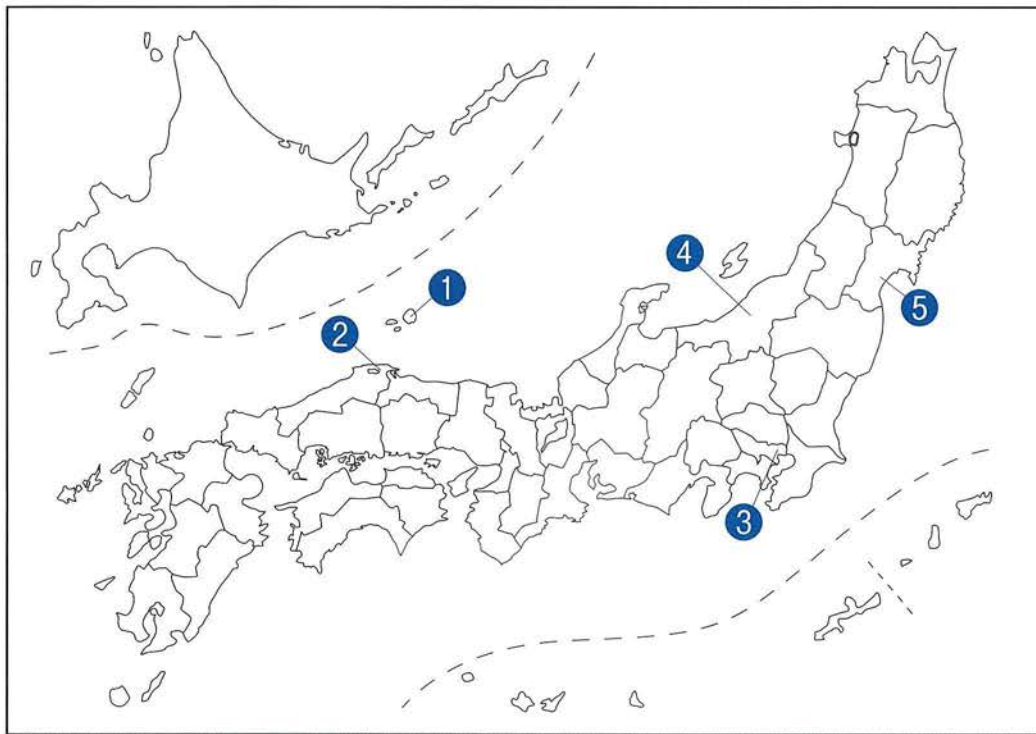


心し、助手に採用したんだ。それをきっかけにして、ファラデーはすぐれた科学者になった。永海くん、君はしょうらい、ファラデーになれ。ぼくもデイビーになるから。」この言葉は、佐一郎が一生、わすれることのできない大切な言葉となりました。

（よし、日本のファラデーと言われるような、りっぱな科学者になろう。絶対になつてみせるぞ。）

佐一郎は、心に決め、英語の先生ではなく、加藤先生が研究していた化学の先生になることに目標を変えました。

その後、熱心に学び続けた佐一郎は大学の先生になり、六十一才まで研究や教育にはげみました。大学をやめてからは、お母さんの待つ隠岐の島町に帰り、自分の家に実験室を作って研究を続けました。



- ① 佐一郎が生まれ育った西郷町（今の隠岐の島町）
- ② 中学校で2年間をすごした松江
- ③ 見習いや助手をした東京高等工業学校のある東京
- ④ 先生としてつとめた新潟県長岡市
- ⑤ 大学生として学び、助教授としてつとめた宮城県仙台市

佐一郎が加藤与五郎先生から教わり、実せんし、西郷町の学校などで話した内容

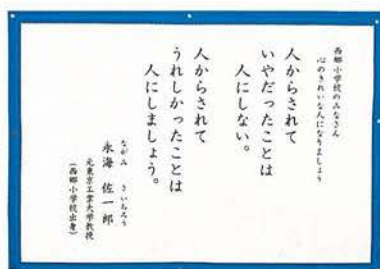
○人としていちばん大切なことは、心のきれいなことである。

○心をきれいにする実行方法

- 一. 人からされてうれしかったことを、人にせよ。
- 二. 人からされていやなことを、人にするな。
- 三. 人から受けた恩は、つつしんでわすれるなかれ。
- 四. 人にほどこした恩は、思うなかれ。

○人のかち＝天職に熱心な度×心のきれいな度

人のかちは、教育、社会上の地位、しゅう入、財産、家がら、職業の種類等に関係ない。



西郷小学校のろう下にはられている、佐一郎の教え



西郷小学校図書館にある、佐一郎の書

11

蒸気船がつなぐ未来 松浦斌の強い思い



西ノ島町別府港にある、松浦斌の銅像

にししま
西ノ島町



松浦斌と隠岐航路について

- 嘉永4 (1851) 年 焼火神社神主の長男として生まれる。
- 慶応2 (1866) 年 焼火神社の神主となる。
- 明治16 (1883) 年 隠岐島議会で、蒸気船を買って隠岐と本土をつなぐことをてい案するが、大反対される。
- 明治17 (1884) 年 隠岐島議会で二度目のてい案をし、蒸気船を買うことが決まる。
- 明治18 (1885) 年 「隠岐丸」の運航が始まる。
- 明治23 (1890) 年 隠岐航路の経営がうまくいかない中、体をこわして38才でなくなる。
- 明治27 (1894) 年 松浦斌の志をつぐ若者たちが、隠岐汽船株式会社を始める。
- 明治28 (1895) 年 隠岐汽船が「第二隠岐丸」も買い、二せきの船が隠岐と本土を行き来するようになる。

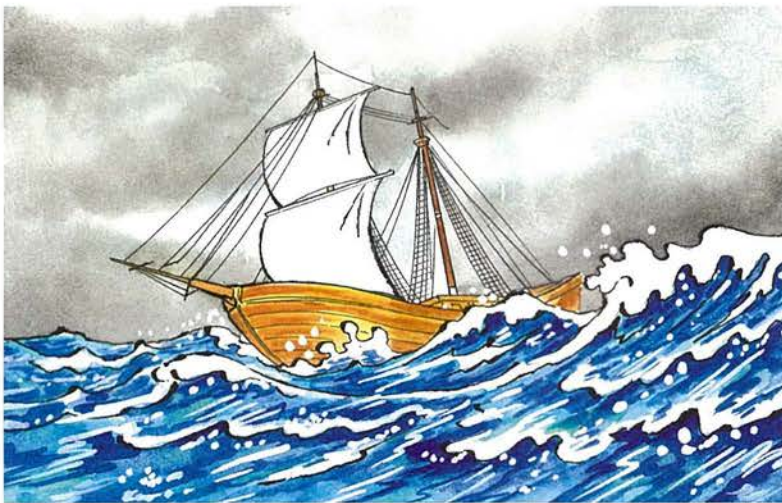
今から百三十年ほど前、隠岐から本土へ行くには、風の強さや向きにたよる小さなほかけ船しかありませんでした。本土まで十日以上もかかり、天気が悪いときにはひと月以上船を出すことができませんでした。台風や冬の冷たい北風で、ほかけ船があら波の中にちんぼつして、多くの命が失われました。また、島には十分な食べ物物がなかったため、本土へ行き来ができないと、島の人とはとてもこまりました。

焼火神社の神主をしていた三十一才の松浦斌は、その様子に、いつも心をいためていました。

(蒸気船があれば、安全に、そして定期的に行き来できるようになる。)

はげしいふぶきと高波の日本海を見ながら、斌は、蒸気船をどうかして買うことができないかと考えました。

明治十六(一八八三)年、隠岐のくらしを決める大切な話し合いで、斌は、蒸気船が隠岐の人びとに必要であることをうったえました。





「みなさん、どうか真^{しん}けんに考えてください。島のみんなで力を合わせれば、蒸気船を手に入れることができるはずですよ。」
ところが、たくさんのお金が必要となる斌^{いけん}の意見^{いけん}に賛成^{さんせい}する人は、だれもいませんでした。島の漁師^{りやうし}からは、

「蒸気船の大きな音で島の魚がにげたら、漁師は生活ができなくなる。」

と、せめられました。

「これまでに、たくさんの方^{のこ}の命が日本海のあら波に飲^のみこまれていきました。残^{のこ}された家族^{かぞく}の悲^{かな}しみや苦^{くる}しみを、みなさんは知っているはずですよ。それに、本土との行き来がしやすくなれば、隠岐のくらしがもっとゆたかになるのです。」

何^{なん}度も何^{なん}度も説^{せつ}明^{めい}しましたが、斌^{いけん}は人びとの考えを变^かえることはできませんでした。

島のために思っているにもかかわらず、斌^{いけん}は、蒸気船に反^{はん}対^{たい}する人々から、石を投^なげつけられたり竹やりでおそわれたりして、身^みのきけんを感じ^{かん}じながら、すごさなくてはなりませんで



した。

やがて、斌さかるは自分の部屋へやにとじこもりがちになりました。

そんな斌を、たびたびたずねる人がいました。隠岐島群長おきとうぐんちやうの高島士駿たかしまたけとです。

「隠岐には蒸気船じやうきせんが絶対ぜったいに必要なのだと、島の人たちに話し続けよう。あきらめなければ、いつか、わかってもらえる日が来るはずだ。」

心強いおうえんを得た斌は、町や村をかけめぐり、蒸気船が安全あんぜんであることや、島の発はってんにつながることに、魚がにげる心配ばいはないことなどを、くり返かえしていねいに説明せつめいしつづけました。次の話し合いでは、斌にかわって士駿が蒸気船について提案ていあんしましたが、また多くの人が反対はんたいしました。その様子ようすを見て、斌はゆっくり立ち上がって話し出しました。

「このままでは、隠岐の島は、本土から取り残のこされてしまいます。隠岐でくらす人のために、蒸気船を買いましょう。わた



しが、そのために必要なお金の半分を出します。みなさんにめいわくはかけません。」

力強く語られる斌の言葉に、反対していた人たちは、とうとう何も言えなくなりました。

斌は、先祖から代だい受けつぎ、守まもってきた山の木を切りたおして、蒸気船をかうお金を用意しました。

そして、明治十七（一八八四）年十二月、ついにイギリス製のりっぱな蒸気船が島にやってきました。

（ああ、これで島がゆたかになるぞ。）

斌は、大きな喜びとともに隠岐の明るい未来を思うのでした。船名は『隠岐丸』。そのマークは、松浦家の家もんになんぞで「三ツ星」としました。

今でも焼火神社がある焼火山の下を通るとき、フェリーは必ず汽笛を鳴らします。汽笛には、海の安全と、隠岐航路開設に力を注いだ斌たちに対する感謝の気持ちがかめられています。



①松浦 斌

「決めたことは、すぐ^{さぐ}に行動^{こうどう}にうつす人だった
そうです。」と、今の焼火神社神主である松浦
道仁^{みちひと}さんは話す。



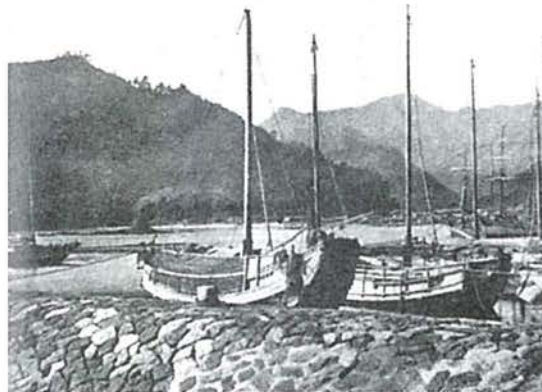
②焼火神社入り口

焼火山に神社がある。入り口から神社まで、
歩いて15分ほどかかる。



③焼火神社本殿

岩場^{いわば}の横^{よこ}に建て^たられている。フェリーが通る
ときには、今でも汽笛^{きてき}が聞こえる。



④ほかけ船

当時^{たふ}使^{つか}われていたもの。(出典『隠岐の人びと』)



⑤初代蒸気船「隠岐丸」(左) と今のフェリー「しらしま」(右)

隠岐と本土の行き来をするだけでなく、本土からさまざまな物資^{ぶつし}がとどくなど、蒸気船は、島民^{とうみん}
にとって欠かせないそんざいである。



12
少しだけなら

「ねえ、お母さん、パソコンを使ってもいいかな。学校の調べものがあるんだ。」

あつしたちは、総合的な学習の時間で、遠足のパ
ンフレットづくりをしています。あつしは、中央公
園の担当になりました。

「だめよ。きちんと使わないと、たいへんなことにな
るんだから。お母さんは今から買いものに行く
から、帰ってきたらいっしょに見てあげるわ。」

「大じょうぶだよ、学校で習ったから。みんなも、
家で使っているって言っていたよ。」

「本当に、大じょうぶなの。」

「ちゃんとやくそくを守るから。ぼくをしんじて。
ねっ。」



あつしは、パソコンを使うときは『時間を決める』、『あやしいサイトは見ない』、『名前や住所などは入力しない』、ということを、お母さんとよくそくしています。

「大じょうぶね、しっかり守るのよ。」

お母さんは、そう言う買いものに出かけました。

「いつものように、タイマーをセットして……。」

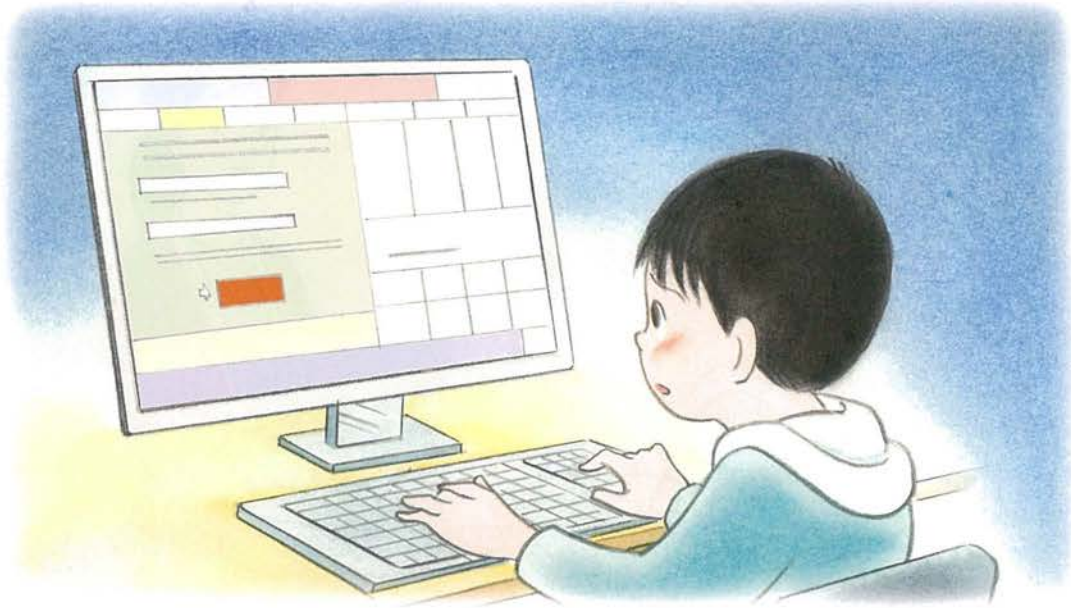
あつしは、さっそく、パソコンに向かいました。

「中央公園」と入力すると、うまくサイトを見つかることができました。

「よし、これをいんさつしたら、できあがりだ。」

そのときです。画面の右はしに、気になるものを見つけました。

「なにに、ゲームソフトのわりびきけんがもらえるのか。でも、あやしいサイトは見ないって、お母さんとよくそくしたから……。でも、少しだ



けなら、大じょうぶだろう……。」

あつしは、おそろおそろ、クリックしてみました。

『あなたの名前と連絡先れんらくを入力してください。』

「ええっ、名前を入れないとダメなのか……。仕方しかたないな。」

あつしは、パソコンの電源でんげんを切り、中央公園のいんさつぶつを整理せいりし始めはじめました。

でも、あつしは、ゲームソフトのわりびきけんが気になって仕方ありません。

「少しだけなら、いいかな。それに、お母さんもまだ帰ってきていないし。」

あつしは、もう一度いちど、パソコンの電源を入れ、先ほどのサイトにすすみました。

「名前と連絡先か……。少しだけなら、大じょうぶだろう。きっと、みんなもしているよ。」

ときどきしながら、名前を入れ始めたときです。



ピピッ、ピピッ、ピピッ。

タイマーの音が、へやの中にひびきわたりました。あつしは、はっとしてキーボードから手をはなしました。

カチッ。タイマーの音を止めたあつしは、じっとパソコンの画面を見つめました。

(ふう……。)

大きいためいきをついたあつしは、ゆっくりとゲームソフトのサイトをとじ、パソコンの電源を切りました。そして、中央公園のいんさつぶつを整理し始めました。

そこに、お母さんが買いものから帰ってきました。「ただいま。あらっ、ちゃんと使えたのね。やくそくも守って、えらかったわね。」

「うん……。」

あつしは、下を向いて、ぽつりと答えました。

13 レストランで



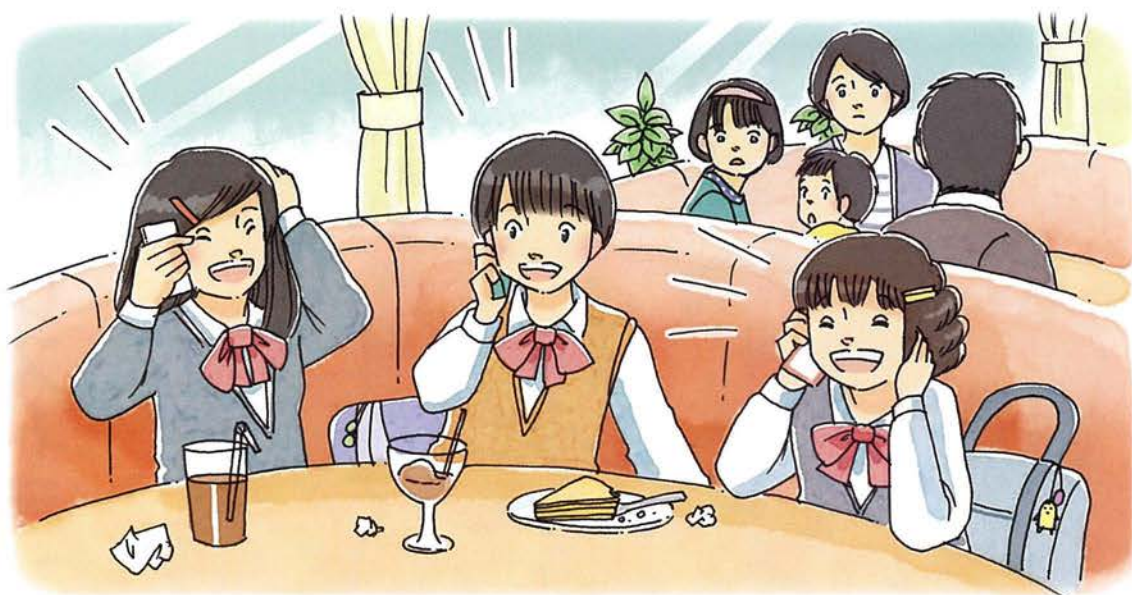
今日はわたしの誕生日たんじょうびです。誕生日を家族かぞくでおい
わいすることになり、夕方から近くのレストランに
出かけました。その日がちょうど日曜日だったので、
わたしたちが着いたときには、レストランはお客さ
んでいっぱいでした。

たまたま入口近くのテーブルがあいて、そこにす
わることができました。いつも来ているレストラン
でしたが、今日はわたしの誕生日ということもあり、
いつもとはちがった気分でした。

「さあ、あなたの好きな物ものをたのみなさい。」

「やったあ。」

と、おいしそうな物、食べたい物をみんなで注文ちゅうもん
しました。



注文した物が来るまでの間、家族で色々な話を
待っていました。家族のみんなが、心からわたし
の誕生日をお祝いしてくれていることがつたわっ
てきて、とてもうれしい気持ちでいっぱいになりま
した。

しばらくして、わたしは、近くのテーブルにすわ
っている三人の高校生くらいのお姉さんたちが気
になりはじめました。三人ともけいたい電話でしゃべ
っています。まわりの人の話し声が聞こえにくくな
るくらい大きな声なのです。

レストランにいる人たちは、まわりの人たちのこ
とを考えて、めいわくのかからない声でしずかにお
しゃべりをしています。そんな中、大きな声で、け
いたい電話でしゃべっている高校生くらいのお姉さ
んたち。



「今、わたし、レストランにいるの。友達といっしょよ。」

「ねえねえ、この前、たのんでおいたことできた。」

「今度またみんなで遊びに行こうね。」

三人とも、それぞれの電話の相手と話しています。店の人が、

「ほかのお客様のごめいわくになりますから、けいたい電話はごえんりください。」
と注意して話しつつけています。

店の人のこまった顔がわたしの心に強くのこりました。まわりの人たちも、三人をちらちら見ながら、めいわくそうな顔をしています。

わたしは、思わず、

（ここはレストランです。みんなのことを考えてください！）

と大声でさげびたくなりました。きっと、ほかの人



も同じ気持ちきもちだったと思います。

それから、わたしたちのテーブルには、注文ちゅうもんした料理りょうりがどき、家族かぞくで楽しい時間をすごすことができました。わたしにとって、すてきな誕生日たんじょうびになりました。

でも、レストランを出るとき、ふたたびわたしは、けいたい電話で大きな声で話していたお姉さんねえたちのすがたを思い出しました。

わたしは、

（ここはレストランです。みんなのことを考えてください！）

と、もう一度いちど、大きな声でさけびたくなりました。

編集委員

氏名	役職	所属等	
永田 繁雄	教 授	東京学芸大学	監修者
毛利 直巳	校 長	松江市立古江小学校	編集委員長
京谷 雄輔	教 諭	松江市立島根小学校	編集委員
河村 恭子	教 諭	浜田市立今福小学校	編集委員
中村 浩志	教 諭	津和野町立津和野小学校	編集委員
川角 朋之	指導主事	奥出雲町教育委員会	編集委員
山根 久美子	指導主事	隠岐の島町教育委員会	編集委員
遠山 茂樹	指導主事	松江教育事務所	編集委員
竹田 賢治	指導主事	出雲教育事務所	編集委員
堀江 真佐邦	指導主事	浜田教育事務所	編集委員
和田 政幸	指導主事	益田教育事務所	編集委員
宇野 陽子	指導主事	隠岐教育事務所	編集委員
青山 浩晃	指導主事	島根県教育センター	編集委員
矢野 英明	参 事	島根県教育庁	事務局
片寄 泰史	指導主事	島根県教育庁教育指導課心の教育推進グループ	事務局
山本 一穂	社会教育主事	島根県教育庁教育指導課心の教育推進グループ	事務局
須田 秀樹	指導主事	島根県教育庁教育指導課心の教育推進グループ	事務局

編集協力者

永島 有香	教 諭	津和野町立津和野小学校
長嶺 歩	非常勤職員	津和野町立津和野小学校
石川 文雄	指 導 員	益田市教育委員会

	内容	写真／絵
	道徳の時間は……	クリエイティブ・ノア (吉田健二、なぎさ謙二、宮崎匠)
	大きな心を育てよう	土江徹
1	新しい田んぼを作ろう	クリエイティブ・ノア (吉田健二)
2	泳げ、空高く	
3	一万まいの花びら	土江徹／クリエイティブ・ノア (坂道なつ)
4	お手本はいらない	
5	たった一人のお医者さん	クリエイティブ・ノア (宮崎匠)
6	石見神楽面作りの喜び	どんちっちサポートいわみ (「八幡」般若面)、 浜田石見神楽社中連絡協議会 (「塵輪」赤鬼)、 浜田石見神楽社中連絡協議会 (「有明」化け猫)、 アイ企画 (作業中の柿田さん)、 浜田石見神楽社中連絡協議会 (「鍾馗」)
7	よみがえれ、お茶畑	クリエイティブ・ノア (イシヤマ アズサ)
8	三かぶのいぐさ	クリエイティブ・ノア (吉田健二)
9	名賀にひびけ、汽笛	SL応援団、ギャラリー・アイヒェル代表 岡本國治、吉永昂弘 山口県観光連盟、益田広域消防本部 津和野分遣所
10	日本のファラデー	クリエイティブ・ノア (なぎさ謙二)
11	蒸気船がつなぐ未来	クリエイティブ・ノア (吉田健二)
12	少しだけなら	クリエイティブ・ノア (なぎさ謙二)
13	レストランで	クリエイティブ・ノア (坂道なつ)

しまねの道徳 小学校・中学年

平成27年3月20日発行

発行所 島根県教育庁教育指導課

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

